



## 近世漢語の新研究 [全文の要約]

著者	佐藤 晴彦
発行年	2015-09-18
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416乙第488号
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00000265">http://doi.org/10.32286/00000265</a>

研究科	東アジア文化研究科	年 度	2015 年
論文名	近世漢語の新研究	氏 名	佐藤 晴彦

#### 論文要旨

### 第一章 『三言』における馮夢龍の創作

馮夢龍が編集した『喻世明言』（『古今小説』）、『警世通言』、『醒世恒言』のいわゆる『三言』の各作品が、それぞれどの時期に成立したのかという問題については、1930年代より、鄭振鐸、孫楷第、趙景深、譚正璧などが諸説を提出しているが、いずれも説得性に欠ける。ところが1973年に出版された P.Hanan “*The Chinese Short Stories*” は “*Stylistic Differences*” という新たな手法で、150篇にのぼる「話本」を①GroupA、②GroupBなど7期に分類するという画期的な研究を発表し、非常に高い評価を得た。これに対し筆者は、『三遂平妖傳』（旧本、20回本）と馮がそれを増補改訂し完成した『天許齋批點北宋三遂平妖傳』（新本、40回本）を比較し、そこからA類：馮夢龍が使った語、B類：馮夢龍が使わなかった語を抽出し、それを『三言』にあてはめ、馮夢龍が創作した巻を判定した。P.Hanan 説と筆者の結論とは8割方一致をみた。

### 第二章 異体字繫年論

「異体字繫年論」とは、一定の異体字の出現期を抽出し、そこから成立時期、出版時期が不明の作品の成立時期、出版時期を推定しようとする方法である。この方法により、筆者は、小説の分野では『水滸傳』の成立時期、国家図書館蔵『水滸傳』残巻の出版時期、『金瓶梅詞話』成立時期、『三遂平妖傳』の出版時期を明・嘉靖期と推定した。戯曲の分野では、『脈望館鈔校本古今雜劇』の各版本が、于小穀本>古名家本>内府本>息機子本の順で古いものを残していること、李開先編の『改定元賢傳奇』は嘉靖28年から萬曆17年間の言語状況を反映していること、1975年に発見された『劉希必金釵記』は、「宣徳柒年」（1432年）という書写時期の言語を反映しつつも、介詞、連詞の“共”があり、複数に“毎”と“門”を使っている点、“元來”がある事などから、元代の言語の状態を残している事を指摘した。

### 第三章 言語接触編

第三章は、第一節漢兒言語、第二節琉球官話課本からなる。「漢兒言語」とは異民族の統治下にあった中国人(漢兒)が使う中国語のことで、モンゴル族が支配した元代では、アルタイ系諸語に属すモンゴル語が、シナチベット諸語に属す中国語に影響を与え、文末に“有”を常用するなど、一種独特な中国語となった。『孝經直解』は「漢兒言語」の代表的な資料で、『元版孝經直解』解説では、編者・貫雲石の生涯を記述し、同時に文末の“有”の消長について考察した。『孝經直解』はやや難解であるため、本文の校訂を行った。また1998年韓国の大邱で発見された旧本『老乞大』は、それまでの『翻譯老乞大』『老乞大諺解』よりさらに古い『老乞大』であり、二十世紀最後の大発見だと言える。それを「現代語に関連がある語」「現代語に受け継がれていない語」の二つの観点から考察を加え、「漢兒言語」の資料ではあるが、元代から現代語への関わりを考える場合でも、また宋元時代の言語との関わりを考えるうえからも、非常に重要な資料であることを説いた。

「3.1.4 “一壁有者”考」では、『元曲選』『元曲選外編』で50数例ある“一壁有者”「あ

ちらにひかえておれ」という表現について考察した。元代の言語は、一般的な言語と、モンゴル語等の影響を受けた「漢兒言語」と呼ばれる言語とに分けられ、“一壁有者”は後者に入る。“一壁”“有”“者”の三者に分けて考察した結果、“一壁”“一壁廂”“一邊”の違いを指摘し、“有”と“在”の混同という異民族であるがゆえの誤用と、“有”がもつへりくだったニュアンスが混用している表現ではないかという指摘をした。

第二節琉球官話課本では、代表的な琉球資料である『百姓官話』と『人中画』を取り上げて考察した。琉球は当時、中国と交渉があり、北京に使節を送っていたところから、琉球通事たちが学んだ官話は北京官話だというように思われていたが、『百姓官話』『人中画』など、主だった琉球資料の言語を分析した結果、北京官話よりは下江官話の要素が強く、一部に“有 V 没有”“早起”“一點久”など閩語の影響が見られることを指摘した。域外で編集された課本であるゆえ、関係者の言語が反映したのであろう。

#### 第四章 語彙・語法編

“難道”に関する2篇の論文では“難道”の同義語と見なされている“莫不(是)”“莫非”の用法が、『水滸傳』『金瓶梅詞話』では異なることを指摘した。また『醒世姻縁傳』では、“没的～麼”と同時に“難道～麼”という言い方が使われており、現代語の“難道～嗎”という呼応ができあがっていることを指摘した。“～里地”“～里路”に関する2篇の論文では、～里地／～里路は北方語／南方語の差が存すること、“～里田地”“地名+田地”は元代で使われ、元末には“地名+地面”がそれにとって変わったことを指摘した(但し、“～里地面”という用法はない)。「光景」考は、現代語で5つの語義をもつ“光景”が、どういふ変遷を経て、現代語の5つの語義をもつようになったかを考察。「ひかり」という名詞から、「あるいは～ではないか」というモーダルな語義に変化した妙を説いている。

#### 第五章 歴史文法編

『中国語歴史文法』解体に関する論文3篇は、太田辰夫博士の名著『中国語歴史文法』で説かれていることを一旦解体して一覧表とし、そこから新たに中国語史を再構成しようと試みたものである。太田辰夫博士には『中国語史通考』という中国語史の専著があるが、残念ながら、宋代の文法的特徴はどうか、明代の文法的特徴はどうかということを書いた、真の中国語の通史にはなっていない。そこで、一旦『中国語歴史文法』を解体し、さらに肉付けしていくことを考えたのである。

「近代漢語研究の基本問題」は、言語の史的研究で、最も基本となる言語資料を取り上げて論じている。呂叔湘、蔣礼鴻、香坂順一といった名だたる研究者でも、基づいた資料が悪かったために間違った結論に達した具体例を挙げ、筆者自身の自省を含め、よいテキストを選択すべきだと主張した。最もいいのは影印本によることであるが、その影印本であっても、時には出版時に手が加わっている場合もあるので、注意すべきと説いている。

以上、要するに本論文は、言語接触という観点を含め、文字の観点、語彙の観点、文法的な観点、中国通史という観点から、トータルに、総合的に近世漢語をとらえようとしているのである。